

昭和65年2月1日 第3種郵便物認可  
平成21年11月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第40巻第11号



俳句雑誌[おき]

11  
月号

沖  
発行所

# 弓手振り

能村 研三

## 中原中也と山頭火

俳人協会山口県支部大会の講演を頼まれて山口に行った。本年から沖の梅村すみをさんが支部長を務められており、大会の前日梅村さんと支部の事務局長で万緑同人の吉次薫さんのお二人が山口を案内してください。

上総一ノ宮・二句  
野分波背がへしの潮けむり

まずは山口市の湯田温泉の近くにある詩人の中原中也記念館に連れて行っていただいた。

新松子磯馴構へに歌碑立ちて

この記念館は、近代的な建築物で中原中也の詩の世界をゆつくり堪能できるよう、外の風景や柔らかな光を取り入れたり、吹抜を設けることで限られた空間に拡がりとお興行を与えるように工夫されている。

ところで、放浪の俳人として知られる山頭火もこの山口の出身だそう、中原中也とは同時代を生きた人であった。

秋冷や弓手でも振り息止めて

山口と言えば昔から、有名な政治家を輩出した地であるが、二人共に純粹性を持ちながら文学に人生を捧げ、軟弱の徒とも思われた人達であったようだ。

屈強な走り根が守る神輿庫

中也と山頭火は共に山口の人からすれば誇るべき地元出身者ではな

一徹に貨車のよぎりし大花野

深山霧暎重たく戻りけり

減塩に慣らされてをり秋寂びぬ

手作りパンふつさり割きて月を待つ

佳宵とて安請合はせぬやうに

効能書しつかり読みて無月かな

つたのかもしれない。山頭火は破産・離婚、晩年は子供の仕送りに頼る生活というような生活ぶり、中もずつと親のすねかじりでろくに働いていない。こんな二人が山口県人とおもわれたら困る、というのが地元の人たちの本音であったようだ。山頭火がブームになって、山頭火が訪ねたゆかりの地との結びつきをアピールして街おこしの材料にしたそうだが、地元は最後まで彼の顕彰を躊躇していたという。

中也と山頭火は近い場所ですごし、同時代を生きたもの同士であったが二人が出合うことはなかった。詩人としてしか生きられなかった詩人と、放浪の俳人として生きることしかできなかった俳人であるが、この二人が出会ったらどういうことになっていたのでしょうか。

能村 研三



# 蒼茫集



厄日来る

松本圭司

洗車するホースが暴れ厄日来る  
西瓜冷え地球はいよいよ温暖化  
マンゴーの大きな種の秋思かな  
道化師に秋惜しむかの描き泪  
この店のこの席が好き十三夜  
月光もゆがむ明治の板ガラス

気圧の谷

松井志津子

葉鶏頭沖に気圧の谷据る  
去ぬ燕灘の潮目の藍深し  
土地つ子とわかる黒さやせいご釣  
二尺玉煙退くまで待たさるる  
流灯の末知の暗さに相寄り  
描きかけの絵のごと海の夏終る

尻取り合戦

久染康子

秋風の遊びはじめの高檣  
煮える迄尻取り合戦芋煮会  
単線路花野を二分してゐたり  
雷が好きで夫に恐れらる  
棒捲きの葭簀寝かせて茶屋仕舞  
裏木戸の押し戻さるる萩の叢

手話の語尾

菅谷たけし

夕顔の動き畳み目闇匂ふ  
打水やこころの中を風通る  
水澄めり真昼を眠るホームレス  
白桃の内側に色ためてをり  
曼珠沙華ふつと思ふは千田百里  
秋雲や緩くやさしく手話の語尾

描くなら 千田 百里

描くなら墨こそよけれ曼珠沙華  
眠た気な森に鳥居や夕かなかな  
羽化叶ふかも月明の野に出れば  
竜淵に潜む夜旅の地図に朱を  
子の重み知らず稿負ふ夜長かな  
いまやうの李白と酌めば月隠る

母郷行き切符 北川 英子

花火待つ湖の広さの闇舞台  
秋扇たうとう言はずじまひかな  
銀河まで至るか滞空十四時間  
うつ向けばもつと落ち込む鱗雲  
明日といふ未知へ秒針音澄めり  
逝く秋の誰居ぬ母郷行き切符

受胎告知 荒井千佐代

差す潮のさざ波となる合歡の花  
炎天や象形文字の鳥けもの

盆過ぎの被さつて来し裏の山  
銀漢やたんすの奥の負おぶひ紐  
病人の爪ばかり伸ぶ秋日和  
小鳥来る小暗き受胎告知の図

絶筆 藤原照子

みづからの胡弓に酔ひて風の盆  
沢枯梗ここよりは旧糸ちごみち  
SLのかき分けて来る秋ざくら  
咲くまへの熱気地に秘め彼岸花  
糸瓜棚子規絶筆のこの日此処  
ついて来し子規庵よりのぬのこづち

名 月 森岡 正作

どこからか子が湧いてくる盆踊  
稲雀 一個 中隊ほど潜む  
名月に触れ来し人のみな笑顔  
曼珠沙華茎びつしりと銚をなす  
端正な顔秋鮭の刃を待てり  
しばらくは虫に浸れり仕舞風呂

うす紅し 吉田政江

張り具合見て男去る鳥威  
祭櫓これが最後といひて組む  
燕帰るどちらへ傾ぐ議席数  
夾竹桃波郷の詩魂うす紅し  
秋の蚊を連れて戻りしにはか雨  
気づかるまでのどきどき曼珠沙華

灯台 遠藤真砂明

シヨベルカー波止場の西日まともにす  
秋風の藻屑あさりや磯鴉  
夕風がすこし萎れて酔芙蓉  
男手で磨ぐ新米のひかりかな  
つれ鳴きのかもめに二百十日かな  
灯台が発射されさう天高し

摺り足 千田 敬

種ふくべ形よき故の孤独かな  
台風来つつあり葺ひかりをり  
海あれば陸ある硯虫しぐれ  
朝寒登四郎先生思うときの摺り足歩き師に似るも

千年を砂噴き上げて水の秋  
わが身とて末は粉々天の川

初陣 秋葉雅治

岬晴れて初陣らしき鷹渡る  
九十九里つるべ落しに離陸せり  
浜に出てゴーグルつけて秋遍路  
群れ生ひておのおの自立曼珠沙華  
近影は遺影のつもり生身魂  
跡継ぎに閑伽桶持たせ墓洗ふ

触媒 田辺博充

日蝕いま呆然と吾もひまはりも  
触媒のやうに今日まで生きて秋  
黄の西瓜両断されてより点る  
啞蟬よ汝も鳴け過去が風化する  
遠賀川秋声いづくからとなく  
八月十五日コーヒーは無糖とす

クレオパトラの涙 杉本光祥

肩越しに指図飛び交ふ金魚釣  
名水で淹るるコーヒー今朝の秋

己が影さへも恋しき秋暑かな  
蓮の露クレオパトラの涙とも  
霧の中より三山駈けの行者かな  
撤退も勇氣の一つ 初嵐

雲の影 武藤嘉子

たうたうとつづく堰音夏の果  
西空へ白雲ながれゆく晩夏  
大西日真つ直ぐ受けて生きてをり  
水替へて供華の息づく今朝の秋  
ゆく雲の影を追ひつつ盆の道  
新豆腐ちちの拳のおほきかり

画 鉦 成宮紀代子

雁渡し画鉦ばかりの町内板  
バスを待ったつた一人の鰯雲  
ゆきずりの吾を呼び入れ盆踊  
秋灯母の下着に名を印す  
枯芦を分けて鴨寄る水駅  
酒蒸しのあさりかたかた噴く良夜

寸 劇 辻 直美

月の出を待つ嬌恋の鳥瞰図

月光を浴び寸劇のごとき生  
避暑期果つ添木の百合と別れむか  
引越の轍やつゆくさをのこし  
穴まどひ家族構成問はれたる  
蓑虫の新居や子の家が見ゆる

五山送り火 鈴木良戈

大文字爪先だちて拝みけり  
大文字戦死の兄へ護摩木焚く  
妙法の送り火読経揃ひけり  
山影の淡し五山の送り火に  
大文字の弾けし火勢合掌す



# 潮鳴集



明るき詩

栗原公子

小鳥くる明るき詩をうたへよと  
窓ほそく開けて眠りぬ金木犀  
月明や前のみを見てをりしころ  
喫煙は公園の隅小鳥くる  
風を待つ発電風車鳥渡る

ひぐらし

大川ゆかり

音楽のやうに朝顔蔓伸ばす  
ゆふぐれの風嗅ぐ猫や秋近し  
組む指の細く真白き涼しさよ  
いつまでもいつまでもひぐらしなく日  
古琴のゆるびし弦や萩の風

残像

古屋元

鯨舟の会議のごとく集まれり  
残像へ残像重ね遠花火  
鳥渡る時間を積みて貨物船  
非常灯非常階段ちちろ虫  
新木場に波せめぎあふ震災忌

秋漫

今瀬一博

もういいと言ふが口癖生身魂  
いやいやの形は秋の扇風機  
鼓笛隊音が音追ふ秋の空  
秋爆の山ぬぎすてし光かな  
渡り鳥いびつな空を拉し去る

# 沖作品



## 能村研三選

白靴でゆく海までの自由席

千葉

井原 美鳥

黒猫に二百十日の対ひ傷

塩すこし買ひ足す二百十日かな

拝啓と打つて改行鳥渡る

川尻に蛇籠のかわく秋彼岸

岸壁に残る波跡九月来る

秋真昼鳥のかたち雲の翳

二人ゐてふたつの孤独天の川

さりさりと剥かれし梨の雫かな

総身に風の感触秋の蝶

大地よりストロー伸びて曼珠沙華

酔芙蓉夕べは赤いリトマス紙

糸とんぼ風に小骨のありにけり

鮎の香や平家の系譜残る里

秋風の絡むペダルをぐつと踏む

長崎

小田 里己

岐阜

七種 年男

鯛や上りの列車通り過ぐ

起立して胸に当てたる夏帽子

紛れ込むことの安堵や鯛雲

秋灯を引いて夜汽車となりけり

芋の露ピエロのやうに動きけり

素風受く余生に重き地図作り

うす塩の肴を選ぶ居待月

秋の虹筑波にそぼろ雨のこり

秋の夜けふ為すことをなしたへし

星月夜スカイツリーの膝現るる

鳥わたるドックの赤き屋根錆びて

天高しパン販売車子連れなり

望郷や掬つてこぼす今年米

道端の石を秋思の椅子となし

尾道は魚匂ふまち鳥わたる

神奈川

福島 茂

市川市

和田 満水

東京

藤原はる美

# 作品 15句選評

\*  
能村研三

塩すこし買ひ足す二百十日かな

井原 美鳥

二百十日は立春の日から数えて二百十日目の日で、現在の暦で九月一日。この時期に台風が襲来するので、嵐の来る日として暦にのるようになった。この時期は米の収穫時期に当り、また、漁をする人たちにとつても生死に関わることで、台風の来る日を事前にかんがふことが大変重要とされてきた。昔の人々の生活の知恵でも言うのか、こうした日を明確にすることによつて、注意を喚起し災害を被ることに対処した。昔から・塩は人間が生きるのに最も重要なものとされていて、上杉謙信が宿敵・武田信玄に塩を送った話は、武士道の美談として有名な話で、昔から「米は貸しても塩は貸すな」という言葉があつたくらい塩が大切であつた。大きな災害に備えて、塩を買ひ足しておくことも必携であつたのだ。

二人ぬてふたつの孤独天の川

小田 里巳

先日行われた、九州大会で特選にいただいた句。小田さんは、対馬にお住まいの方。この句、「二人ぬて」と言うから・夫婦のことに思えるが、人間は生まれた時も一人、死ぬ時も一人。一人一人が集まつて夫婦とか家族となる。しかしいくら仲の良い夫婦であっても、人は孤独なのだとか作者は述懐する。やや哲学的な句とも思えるが、これからの若い世代の新しい感覚とと思う。

大地よりストロー伸びて曼珠沙華

七種 年男

曼珠沙華は鮮やかな赤い花をつけるので、花にどうしても存在感を感じてしまうが、凛とした緑の茎も他の花とは違って特異性がある。斎藤茂吉は「曼珠沙華」という随想に、「曼珠沙華は、紅い花が群生して、列をなして咲くことが多いので特に具合のいいものである。一体この花は、青い葉が無くて、茎のうえにすぼりと紅い特有の花を付けているので、渋味とか寂びとか幽玄とかいふ、一部の日本人の好尚からいふと合わないところがある。」と書いている。大地よりストローが伸びているという発想は面白い。

紛れ込むことの安堵や鯛雲

福島 茂

世の中には、積極的な「目立ちたがり屋」もいることは確かだが、大方は多くの群の中に紛れることで、密かに暮らすことを好む人の方が多いように思われる。余り摩擦を起さず、人とうまくやっていくための処世術でもあるのだろう。「鯛雲」は小さい雲片が小石のように並び集る「巻積雲」で、その雲の一片と同じように紛れ込んでしまふ安堵感を感じた。

(以下略)